令和元年度ぎふ清流未来の会議　2019年12月7日(土)

クラブ内のマネージメントについて

学校法人三重高等学校 三重中学校・三重高等学校　科学技術部

【本校は2015年度より海洋教育パイオニアスクールプログラムに採択され、助成を受けて活動しています。】

1. 科学技術部での活動について

○松名瀬干潟での調査

松名瀬干潟で、主にウミニナ類の分布調査。毎月一度、松名瀬干潟へ行き、前浜干潟・河口干潟・潟湖干潟の3種の干潟で調査を行っている。また、今後は水槽に干潟の環境を再現し、ウミニナ類の好む環境についても調査を行う予定。

○森林に関する活動

森林の現状を調べると、現状が良くないことを知った。現状を良くしていくために、私たち学生はボランティア活動を行うのが最善ではないかという結果になった。部活では、森林に関する活動に参加したり、森林ボランティアに主体的でない高校生(3年前の本校高校1年生へのアンケートで判明)を主体的にするためのプログラムの作成

○学会等での発表

全国アマモサミット、日本森林学会大会、日本地理学会、みえ自然科学フォーラム　など

○環境教育及びイベントの企画・運営

TOYOTA SOCIAL FES!! 、私学フェア、こどもの城サイエンスフェスタ　など

2. 科学技術部でのマネージメント

科学技術部の部員一人ひとりが主体的な(自ら行動をとれるような)人材になるため

私たち科学技術部は海や森の環境をより良くしていく取り組みを行っており、このような環境を改善していくには一人一人のボランティア活動などへの主体的な参加が重要であると考えている。しかし、3年前に本校の当時の高校1年生に行った森林に対する意識調査では、自分からこういった活動に参加したいと答えた主体的な生徒は少なかった。そこで、私たちは主体的ではない人を主体的にするための森林教育プログラムを作成した。そのような活動を行っていくにあたり、私たち科学技術部の部員は周りの人たちの手本になるべき存在であるが、現在、出席率が低いことや自ら進んで動こうとしないことなどが課題であり、主体的であるとは言い難い部員が多い。そんな部員たちをまずは私たちがマネジメントし、主体的にしていく。

3. 部員に求めるもの

科学技術部では、部員に対し、次の二つのような能力を必要としたい。

①主体的に活動に参加できること。

主体的に、自分から進んで活動を行うことで、活動に関して自分で考え、行動できるようになる。

②活動の内容や意味を正しく理解していること。

理解をしていることで、活動や調査の中で誤った動きをせず、正しいことを正確に行うことができる。

また、長期間継続が必要な活動に関して、先輩が卒業した後も引き継いで調査を行うことができる。

4. 先輩方のマネージメント

これといって具体的な措置はとってなかったように思う。ただ、クラブの運営に関して、後輩たちが自分達でいろいろなことが出来るようになるよう、指導をしてきた気がする。
本当にクラブをやりたい人が、真剣に取り組めるような環境が出来たらと思い、来ない人への対応より、来る人に対しての指導を中心にしてきた。

山本洋輝 先輩(現在 大学3年生)

私が部長をしている間は基本的に下の学年には積極的に話しかけて意見をいったり、質問をしやすい環境を作って、部活に来やすい環境を作ろうとした記憶がある。また、自分から動くことで周りも活動すると言う空気を作ろうとした。また、部活に来てくれて積極的に活動してくれる子には担当を与え、自分から責任感をもって動いてくれるように育てていく、というのが基本的な私のやり方であった。

山本凌大 先輩(現在 大学4年生)

私たちの時も、出席率は悪く、出席表もつけていたが、無理にやる気のない人を参加させようとはしてなかった。少ない人数でもやる気のある人だけでやっていた。それで、基本的に、自分達で考えて動いていたと思う。人に言われる前にやる感じ。後輩とかにも一から十まで全部指示せんと、自分達で考えてやってもらうって感じだった。指示するまでもなく、自分達が何をやればいいか分かっていたのかもしれないが。結果として、効率重視だった気がする。

湊太雅 先輩(現在 大学3年生)

5. 今までに行ってきたマネージメントの種類

どのような部員を、どのような部活を育てるかに応じて、様々な種類のマネージメントを行ってきた。各項目に関しては、後述する。

①部員募集
②道具の管理
③出欠管理
④期限を守る
⑤技術・研究を教える
⑥ディスカッションの管理
⑦礼儀を教える
⑧人間関係を広める
⑨反省会の運営
⑩活動内容を理解させる

6. マネージメント企画の例

FailProject

概要

○企画の生い立ち

後輩が以前から使っていた調査の持ち物等のマニュアルを模倣するだけで、内容や意味を理解していないのではないか。

○目的

・海の調査で必要な道具は何か、それを使って何をするのか、それにはどのような意味があるのか、の3点を正確に理解しているかを確認する。

○このプロジェクトに含まれるマネージメントの種類

②道具の管理

・調査や、日々の活動で使用する道具を管理。
・必要な道具を顧問の先生に注文を依頼する。

⑩活動内容を理解させる

・活動や調査の意味を正確に理解し行動できるようにする。
・長期継続が必要な活動(松名瀬の調査など)を後輩に引き継げるようにする。

○手法

記述テスト形式。

○対象

当時(2016年)の1年生と一部の2年生。

○結果

殆どの部員が確認事項を理解せず活動していたことが明らかとなった。
この後、部員たちは、先輩に質問したり聞いたりして、多くの部員が理解をした上で活動を行うようになった。

○受けた部員の声

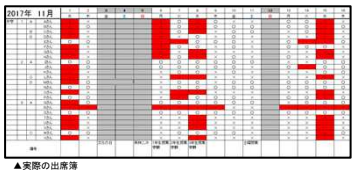
受けたときは、分かっていないことが多く、自分が活動に関して理解できていないことがあることを知った。自分は理解していると思っていたので、自分を過信していたことに気が付いた。自分達で調査に必要なものを理解していれば、自分たちで行動できたり、作業効率が上がったりするので、理解しておくことが必要だと思った。

当時(2016年)中学1年生　宮田陽斗

出欠簿

○企画の生い立ち

一部の部員の出席率の悪さが目立っていた。その部員たちは、主体的・意欲的に活動に参加しようとしていないのではないか。では、そのような部員を出席させることで、主体的・意欲的に活動に参加しようとしてくれるのではないか。



▲実際の出席簿

○目的

出席日数の統計より、自分のデータを見る、また、仲間のデータと比べることで、出席率を向上させる。また、出席させることにより、活動に主体的・意欲的に参加してもらう(きっかけをつくる)。

○このプロジェクトに含まれるマネージメントの種類

出欠管理

・出欠簿をつけ、それによる部員への出席の呼びかけ。
・長期休暇の予定表づくり。
・クラブに参加できるよう、残って宿題をしたり、先輩が教えるなど勉強とクラブの両立をサポート。

○手法

出欠簿をつけ、部員個々の出席状況を管理し、データを集計、数値・グラフ等で可視化する

○対象

中学生

▲出席数、出席率等のデータ及び評価

○結果

出席率は高くなったものの、部室に来て遊んでいたり、ぼーっとしているなど、出席することが主体的・意欲的に活動することには繋がらなかった。出席させるだけでなく、活動に対する部員の意識を変えることが必要なのではないか。

○今後

ToDoリストを作成し、やることを明確にして部員に提示し、自分が何をやるべきなのかを考えさせる。

○受けた部員の声

出席簿記録が手薄になっているときに無意識に休んでしまい、活動に対する意識が低くなっていたことを知った。
自分の出席状況が確認できるのは、出席できていなかったら「もっと頑張って出席しよう」と思えるし、出席できていれば「この調子で頑張ろう」と思えるので良かった。

当時(2016年)中学1年生　宮田陽斗

当時はとりあえず出席数稼ぎだった。
当時(2016年)中学3年生　三宅唯斗

当時は意識が低く、出席数を稼ごうとしていた。
当時(2016年)中学3年生　村林樹

○実行した部員の声

最初は自分が指導できる立場ではないのでは？と思っていた
実際行ってみると、指導しないと、何もできない人が後輩にいたから、自分が指導をしようと思った。実際やると、後輩には怖がられて辛かった。でもそれが行動の変化に繋がっていって、厳しさが相手の為にはなったのかなと思う。

当時(2016年)中学3年生　嶋田凪

7. マネージメントの種類ごとの詳細

①部員募集(図1)

新入生などに対し、部活を紹介する。
結果・部員の変化:今年の新入生は10名程入部してくれた。

▲図1

②道具の管理(図2)

・調査や、日々の活動で使用する道具を管理。
・必要な道具を顧問の先生に注文を依頼する。
結果・部員の変化:多くの部員が管理をできるが、1年生と2年生の一部は未だに難しい部員もいるように感じる。

▲図2

③出欠管理(図3)

・出欠簿をつけ、それによる部員への出席の呼びかけ。
・長期休暇の予定表づくり。
・クラブに参加できるよう、残って宿題をしたり、先輩が教えるなど勉強とクラブの両立をサポート。
結果・部員の変化:出席数・出席率は高くなった。

▲図3

④期限を守る(図4)

・学会・観察会・オープンスクールや企画の準備等の スケジュールを管理。
計画的に物事を進める力をつける。また、期限を過ぎ、関係者の方々に迷惑をかけることがなくなる。
結果・部員の変化:期限を守ることができたこともあるものの、未だに期限を守れないことが多い。

▲図4

⑤技術・研究を教える(図5)

・サンプルの扱い方やパソコンの使い方、研究の仕方やポスター等の作り方を先輩が後輩に教える。
・フィールドでの準備を的確にする。
(部員の役割分担・チーム決め、道具をスムーズに設置等)
結果・部員の変化:サンプルの扱い方は、中2年生以上は作業に参加できるようになったものの、中1年生はまだ失敗が多く、自分たちで行うことは難しい状況にある。その他に関しては未だできる部員はごく一部しかいないように思う。

▲図5

⑥ディスカッションの管理(図6)

・論文やポスターを作製にあたり、ディスカッションができるように管理する。
結果・部員の変化:現在できている部員は3年生以上の一部しか居ないように思う。
我々が管理しつつ、彼らにやらせて、管理する能力を養うことが必要だと感じている。

▲図6

⑦礼儀を教える

・敬意を持つことを教える。
・雑用などを先輩にさせず自ら気づいて行動できるようにさせる。
結果・部員の変化:殆どの部員が先輩等に対して敬意を持っているが、2つ目のように気づいて行動できる部員はまだ少ない。

⑧人間関係を広める

・他の研究者とのディスカッションを積極的に行う。
・名刺を作り、交換し、連絡やコミュケーションをできるようにする。
結果・部員の変化:まだ自分から外部の方と連絡を取ったり、ディスカッションをしようとする部員はほとんどいない。

⑨反省会の運営(図7)

・行事終了後、何が良く、何を改善すべきか根本から考える。
結果・部員の変化:反省会は行っているものの、その時で止まってしまっているのか、次に活かせていないように感じる。

⑩活動内容を理解させる

・活動や調査の意味を正確に理解し行動できるようにする。
・長期継続が必要な活動(松名瀬の調査など)を後輩に引き継げるようにする。
結果・部員の変化:少しずつ一から十まで全てできる部員はまだ少ない。

▲図7